「出題の意図」

選抜区分	２０２２年度　（選抜区分：学校推薦型選抜） 法学部　法律学科及び政策科学科　（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	１　課題文選択の背景 出典は、斎藤幸平『人新世の「資本論」（集英社新書１０３５Ａ）』（集英社、2020 年９月）である。本書は、マルクス経済学者である筆者が、気候変動問題についてマルクス経済学の立場からの解決策を提示したものである。「新書大賞 2021」を取ったこともあって、近時、話題となった書である。本問では、マルクス経済学からの解決策の部分ではなく、冒頭部分の気候変動問題の原因について論じた箇所を取り上げた。 課題文で筆者は次のように主張する。先進国の豊かな生活には、グローバル・サウスからの労働の搾取と自然資源の収奪が不可欠であり、しかも、その先進国の豊かな生活の代償をグローバル・サウスに転嫁する構造が存在する。そして、先進国では、こうした事態が不可視化されている。ところが、地球は有限であるため、グローバル・サウスからの収奪とそこへの転嫁が限界に達し、先進国でも気候変動による甚大な被害という形で可視化されるようになった。冷戦終結後の新自由主義により経済成長を追い求めたことで、気候変動対策のための歳月が浪費され、状況は著しく悪化した。今のシステムを変えない限り、その解決策はない。 2021 年 11 月にＣＯＰ26（第 26 回国連気候変動枠組条約締約国会議）が開かれ、「グラスゴー気候合意」が成果文書として出された。その際、石炭発電の扱いが議論の対象となったことが報じられており、先進国と途上国の見解の相違が表面化している。大雨等による甚大な被害が頻発しているという点からも、気候変動問題に対する受験生の関心は高いと思われる。 こうした状況下で、筆者の主張を正確に読み取った上で、気候変動対策の問題と経済成長を追い求めることとの整合性、さらには実際に先進国である日本で豊かな生活を送っていることと地球への負荷の問題について、改めて受験生に考えてもらうことが、出題のねらいである。 ２　受験生に何を望むか まず、上述した筆者の主張を正確に理解し、適切にまとめる力が求められる（読解力）。次に、筆者の主張を踏まえて、これまで中学や高校で学んできた知識を総動員して、自分の言葉で、論理的・説得的に、あるべき「システム」について展開することが求められる（自説展開力）。